

<利用者の声>

想い出のライブラリー

教育学部教授 笹本 正樹

米国をめぐったとき、カリフォルニア大学パークレー校の図書館によったが、緑あふれる丘の上であり、金髪の美しい受付嬢だったことを想いだす。

東京での学生時代は上野にあった国会図書館に入りびたつた。勉学にはよい雰囲気だった。こちらにきて「現代修辭的教育学」を書く時は、赤坂の国会図書館にコピーを沢山とりに行った。「北原白秋論」を書くときは、大阪府立図書館の「白秋全集」十八巻を調べに行った。「竹久夢二」を書くときは、岡山県立図書館に資料が沢山あり嬉しかった。

小説「さくらんぼ分教場」を書き、日本文学館に収めた時は、文士きどりの気分であった。柳河の北原白秋記念館を訪れたら、拙著が飾ってあった。今度の夢二本は、岡山吉備路文学館に収めにいった。夢二郷土美術館にも入っていると、人づてに聞いた。これらはなんと著者冥利につきることである。

さて、本大学のライブラリーに憩っては、次に何を書こうかと想像するのが、近頃の楽しみである。

フランス文化と図書館

法学部助教授 渡邊 和行

図書館は、一国の文化的水準を示すバロメーターの1つとってよいであろう。文化大国を自認するフランスは、文化を国策として掲げる代表的な国である。最近の大統領選挙の際のミッテランの発言や二大保守政党の共同声明が、それを示している。

それでは図書館は、フランスの文化とどのように関わってきたのであろうか。結論的に言えば、図書館は近代の文化を基底で支える制度として重要な役割を演じてきたということである。図書館は、近代的な知の形成と連動しているのである。なぜなら識字率の上昇・ジャーナリズムの発達といった事柄を抜きにして、図書館というものを考えることができないからである。その図書館は、古文書や公文書の収集・保管という過去を保存する機能と、図書の閲覧・貸出による公民教育の機能とを担ってきた。

図書館へのこのような期待が高まったのは、第二帝制

期の1860年代のことである。ときの政府は、各学校や自治体に図書館を設置することと、小学校の教師に運営を委ねる成人学校の創設とを積極的に推進したのである。その結果、1869年に図書館は、14,395館、所蔵図書合計995,121冊に及び、成人学校も1865年に8,000校、1869年には、33,000校に達した。第三共和政期の1880年には、1万冊以上の蔵書をもつ図書館は505館となり、その蔵書数は7298千冊を数えた(同期の英:202館,377万冊。独:594館,407万冊)。こうして図書館の設置と図書館を活用する成人学校が奨励され、教養の向上を図るキャンペーンが展開されたのである。この精神は第三共和政にも受けつがれ、初等教育の義務化と民衆大学の開設をもたらした。その間も図書館は、いわばフランス文化の貯蔵庫として位置づけられ利用されたのである。

ところで、わが国の図書館は文化装置としての機能を十分に果たしていると言えるであろうか。

図書館のイメージ

農学部教授 西山 壮一

図書館の語感から受けるイメージとしては、私には官学的な建物・整理・整頓・親切なる職員の方々……と次々と浮かんでくる。大学院の学生の頃、よく工学部のある学科の図書室に本を借りに行っていたが、その職員の方が目的とする本を探すのが速くて、感心したり、驚いたりしていた。今から考えると、これこそ整理の賜である。我が研究室の資料もこのようにあってもらいたいと思うが、なかなか進まない。図書館では、計算機が導入される条件が整い、おそらく大学の中では、最初に機械化されたに違いない。私の予想であるが、情報化時代がさらに進むと、全部の本ではないが、本そのものがコンパクトなディスクに入り、種々様々の利用方法が発達すると思われる。現在のように、本をいちいちコピーして利用しては、時間、手間がかかる。また、本を保管するスペースも、長い年月の間には、バカにならなくなる。大量のデータを印刷物としてよりも、テープ等でいただいた方がより利用価値があることから、発展方向は大略予想がつく。

このように考えると、図書館のイメージも、今後は少しずつ変わり、情報処理、コンパクトなディスク等が、先に浮かぶに違いない。

最後に学生に苦言を申し上げて本稿を終りたい。学生が実験等のレポートを書く場合、図書館の本を利用することは多いと思う。少い例ではあるが、レポートは立派

?に書いていても、その本人が内容を理解していない。すなわち、書くために物理的に手だけが動いたのみで、脳細胞は全く動いていない。やはり、一旦自分の頭に納め、整理してレポートを書いてもらいたい。そのようなレポートであれば、提出のとき、内容について口答試問を受けても、立派に答えてくれるのである。

附属図書館について

教育学部 3年
柿元 里美

現在の香川大学の図書館は、まさに勉強する場となっており、落ちついて学習に取り組める場になっていると思います。それは図書館としての環境設備がよく、蔵書を豊富に取り揃えてくれているおかげだと思います。

しかし、これほどたくさん本が揃っているのに、教育学部の専攻に関する図書はたいへん少ない、ということが気になります。私は家政学を専攻しているのですが、実験その他で参考したい本を探しに図書館に行っても、目的に合った図書がなかなか手に入らないということがしばしばありました。

私たち学生は、レポート提出、あるいは講義や演習のための資料収集、趣味の読書など、あらゆる場合に図書館を利用しています。それだけ私たちにとって図書館は大きな位置を占めているのです。だから、もっともっと、あらゆる種類の本を購入して、さらに充実した内容の濃い図書館にしてほしいと思います。

経済学部 4年
佐々木 和美

午前中の図書館で、棚から取り出すだけで疲れそうなほどの専門書を前に、授業の義務を果たすために苦心惨憺するとき、文庫本を読んでいる人をふと見つけたりする。それは時には推理小説であったり、もう古典とよばれる文学であったりするわけだが、いずれにしても私の溜息を誘う。大学の図書館と文庫本は、一見すると、ちょっと不似合いな組み合わせのように思われる。しかし、こういう時には、まだそう捨てたものではないと一人で感心している。

私は本を選ぶとき、文庫本から探し出すことが多い。理由は様々あるが、探しやすいという点からすれば、目録があるということが一つの理由かも知れない。加えて、季節ごとの各出版社の文庫本キャンペーンにのせられやすいということがあるかも知れない。また実際に読みはじめると、どこでも読めるという便利さも大きな理由

になる。そして、これはその人の好みが大きく左右することではあるが、この本はぜひ文庫本で読みたいと思うことがある。もちろん、その逆にこれは絶対にハードカバーの重々しい本でなければ、気分がのらないというようなものもある。もっといえば、この作家は文庫本向きだとか、いろいろとこだわる評論家もいたりする。私もどちらかといえばこだわる方かも知れない。例えば、中勘助の『銀の匙』という作品があるが、これは岩波から文庫本で出ている。しかし、文庫本には向かないような気がしている。香川大学の図書館で白い表紙のハードカバーを見つけて以来、すっかりファンになってしまった。逆に、三島由紀夫の『橋づくし』という短編は絶対に文庫本と決めている。理由は、と聞かれると、なんとなくとしか答えようのないほどのものであるが、ちょっとこだわってみたいものである。

しかし、どちらかといえば、私には文庫本で読みたいと思う作品の方が多いように思える。だから、最近の文庫本ブームは大いに歓迎している方である。そのブームの理由の一つは、本当に手軽に周囲を遮断できるという点にあると思う。もともと本を読むという行為は、周りの人からみれば、話しかけづらいものである。その作用が、家族に対したときですら、有効であるとするならば、これほどの遮断装置は他にないわけである。やはりこうしたブームは、現代人のかかえる問題と無関係ではないようだ。私にも心当たりがないわけではないが、せめて、文庫本が悩み多き現代人への良き処方箋になることを願うばかりである。

農学部 院生
鈴木 則行

私は、この3月に日本大学農獣医学部を卒業しまして、4月からこの大学の大学院農学研究科で、お世話になっております。今回図書館だより「利用者の声」として、一言書くことになったのですが、学生側の声を図書館側が聞いてくれるこの企画は、とても良い事だと感じました。

図書館というと、大学時代には卒論作成の際に少し利用しただけで、ほとんど利用しませんでした。しかしそんな私もこちらに来まして2ヶ月足らずであります。毎日のように図書館(農学部分館)を利用しています。では何が私と図書館との距離を近づけたのでしょうか。それはまず当然のことながら研究の為に、必要に迫られて利用するのが大きな理由であることは、間違いないのですが、幾つかの利用しやすい点が、私を図書館へ近づけさせるのも事実です。

それはまず、日本大学農獣医学部の図書館は、ほとん